

## 本間先生

増 田 久美子

わたしが本間邦雄先生にはじめてお目にかかったのは、15年も前のことです。本学の採用面接の際、面接官のおひとりが本間先生でした。提出論文に関する先生からの質問に極度に緊張しつつ、「わたしの拙い論文をこんなに丁寧に読んでくださったとは！」と感激したことを覚えています。面接終了後、自宅でさっそく駿大ホームページを検索してみると、「なんと、あの先生はポール・ヴィリリオの翻訳者だった！」と驚いたのです（本来ならば、「あのリオタール研究の本間先生だった！」と驚くべきところでしたが、わたしは無学すぎました）。その面接の翌年度、本間先生はフランスへ一年間の在外研究に行かれましたので、実際に一緒にお仕事をさせていただくことになったのは、その衝撃の面接からしばらくしてからのことでした。

本間先生は本学が開学した1987年以来、大学の教育・教務・入試・国際交流等で主導的な役割を担われ、1997年に現代文化学部が開設されてからも、教務委員長や学部長、外国語教育センター長等を歴任されてきました。そのような重責ある職位に就かれながら、わたしたち若輩の教員が本間先生に近寄りたさなど微塵も感じなかったのは、そのお人柄ゆえといえるでしょう。先生は気さくで、おおらかで、飄々としていらっしゃる一方、何か問題が生じれば、それに憤然と立ち向かう「怒れる」先生でもありました。そして、誰よりも人間的で人情的で、つねにわたしたち教員と学生のために行動してくださいました。だからこそ、わたしたちは先生に惹かれ、指導を乞い、多くの助言を求めてきたのだと思います。

本間先生が本学を去られるのは、いまなお信じられません。まだいろいろと教えていただきたい

と願う教員や学生は、おそらく、わたしだけではないでしょう。と同時に、わたしは甚だ無遠慮にも、先生が大学でなさってきた活動や発表されてきた著作のなかに、何か大切なことをわたしたちに残してくださっていると慮ることによって、先生のご退職の事実やその意味を理解しようとしています。

年度初めのオリエンテーションキャンプでの懇親会は、現代文化学部の教員たち一同がともに楽しい時間を過ごせる貴重な機会でもありました（この席上では本間先生から惜しみなく提供されるフランス産高級ワインと、廣野先生ご提供の高級紹興酒や日本酒がずらりと並び立つという類いまれな時間でした）。20代のお若い先生から本間先生のようなベテラン教員までが、ひとつの空間で夜を徹して語り明かすのです。もちろん懇親会のみならず、本学部に降りかかるさまざまな状況のなかで、わたしたちは世代と職階とそれぞれの立場という垣根を超えて行動しようとする意識を共有してきました。その親和力の高さは本学部の自慢のひとつであり、わたしたちを親身にかつ辛抱強くサポートしてくださる職員のみなさんも、わたしたちの誇りです。このような学部を作り上げ、牽引してくださった中心人物のおひとりが、本間先生であることは間違いありません。

本間先生が退職されたのちも、わたしたちは先生をかこんでワインと紹興酒を傍に、楽しくおしゃべりする日が来ることを心待ちにしています。